

西部開発事業（畑地帯総合土地改良事業）

—緊急発掘調査報告—

# 与地原・北割遺跡

1977

伊那市教育委員会

南信土地改良事務所

西部開発事業（畑地帯総合土地改良事業）

—緊急発掘調査報告—

与地原・北割遺跡

1977

伊那市教育委員会  
南信土地改良事務所

## 序

伊那市の郊外西箕輪地区は、経ヶ岳山麓から、権兵衛峠に至る山麓線上に発達した集落が展開している。これらの集落は北部に大泉川、中部に大清水川、南部に小沢川が流れ、それらによって形成された河岸段丘と、山麓線より押し出した扇状地、いわゆる複合扇状地に立地している。

これらの地区には、必ずと言っていい程に湧水があり、したがって、原始人達はそれを求めて、その地に住みついた。それが遺跡であります。

昭和51年12月より西箕輪羽広、与地両地区で、西部開発事業が開始されることになり、この、北割遺跡、与地原遺跡の緊急発掘調査を実施することになった。幸いに、南信土地改良事務所、長野県教育委員会文化課、文化庁の御配意により、予算もつき、団長に友野良一先生をお願いして、調査団を編成し、発掘に着手した。発掘にとりかかって、毎日、寒さと、霜柱、あるいは雪に悩まされた連続であったが、皆様の献身的な御協力によって調査が無事終了出来ましたことは、誠に喜びにたえません。

二つの遺跡の調査の成果は報告書をみてもらえばわかりますが、ここで、一応簡単にまとめて述べておくことにします。

北割遺跡では縄文時代中期の住居址4軒、与地原遺跡では土括8、ロームマウンド1であります。

ここに、調査報告書の発刊にあたって、南信土地改良事務所をはじめ、長野県教育委員会文化課、文化庁、調査団の諸先生、発掘作業員の皆様に衷心より謝意を表する次第であります。

昭和52年3月10日

伊那市教育委員会

教育長 伊 沢 一 雄

## 第Ⅰ章 まえがき 与地原・北割遺跡の環境

### 第1節 位 置

与地原遺跡は、長野県伊那市西箕輪与地部落、北割遺跡は西箕輪羽広区北割部落に所在しています。遺跡地までの道順として、与地原遺跡は伊那市街地より、西方へ、国道136号線に沿って約1kmさかのぼると中央高速道路と交じわる地点に至る。この周辺は月見松遺跡として有名な場所であります。ここより西へ舗装された直線道路（国道136号線）を約3km程行くと権兵衛峠の玄関口である与地部落に至る。この附近で間道と別れて、右折して、北へ300m程と行くと、与地公民館が左側にある。この公民館の入口には伊那節発祥の碑がある。この位置に立ち留まって、視野を東に向いた位置が与地原遺跡である。現況は水田や桑畑に利用されている。標高は920m～950m位の範囲内にある。

北割遺跡は伊那市街より西へ向って、大萱・荒井線を約3km程遡ると信州大学農学部の白い校舎が目に映える。さらに1km程西方へ向うと、西箕輪小学校、西箕輪中学校に到着し、ここから与地辰野線を北へ約2km行くと、羽広部落の入口に着く。この地点で西方の山麓線上に目を転ずると、伊那市立考古資料館と仲仙寺が目の中に飛びこんでくる。この地点より複雑な道跡を北へ向って約1km程と行くと北割部落があり、この部落の周辺が北割遺跡として指定されている場所である。

発掘地点は標高920m前後を示しており、桑畑や水田に利用されている。また当地より北側の大泉川までは約2km程ある。水利の便が悪いためにため池が各所にわたって存在していた。

### 第2節 地形・地質

西箕輪地区は、どのような地形・あるいは地質に該当するかを考えてみると、伊那市内のなかでは最も眺望の優秀な地区に含まれていると思われる。羽広の考古資料館の前庭にて東方を見ると、ひときわけわしく聳える南アルプスの主峰の一つとなっている仙丈ヶ岳が見え、その前方に南北に連なる伊那山脈がある。これらの山脈の間をぬうようにして三峰川が流れ、見事な段丘を形成して伊那市東春近郷島附近で天竜川と合流する。

西側に目を向けてみると、南北に走る山脈が存在しており、その主峰は経ヶ岳であり、この標高は2,296mである。西南の向きに一段と高く見えるのが、駒ヶ岳の前山である将碁頭である。この近くに伊那小屋と称する登山用の山小屋がある。この山の右傾斜面の低くなつた地点が権兵衛峠である。権兵衛峠は江戸時代につくられた古道であり、伊那節のなかでも歌われているように高遠領の米を木曽路へ運搬したルートとして有名な峠の一つである。この峠をとりまくようにして、山麓線上に横山・内の萱、大坊・平沢・小沢の各部落が展開している。この峠附近より流出した川は小河川を成し、これが小沢川と呼ばれる県の一級河川となり、東流して天竜川と合流して太平洋に注ぐ。天竜川は太平洋に注ぐまでに伊那谷と呼ばれる盆地状地形を形成して、見事な段丘上地形を展

## 第Ⅰ章 まえがき、与地原・北割遺跡の環境

開している。

次に西箕輪地区内に限定した地形ならびに地質については、明治35年7月20日発行、長野県上伊那郡西箕輪村尋常小学校長、小林茂理編（わが郷土）を全面的に引用させてもらうことにした。それによると、『細かに観察すれば、自ら三個の大区域に分けて居る。

(1)を大泉所傾斜地、(2)を藏鹿傾斜地、(3)を御射山傾斜地と名を付けようと思う。一体、山は遠方より見れば、指鉢でもふせたかのように、その傾斜がすらりと削り成したるよう見ゆれども、近きて之を見れば、実はなかなかさようではない。いくつかの谷が峯に集り、ひだをなして出来て居る。吾が経ヶ岳も、矢張其通りである。我が学校に面したる谷のつまりは、経ヶ岳の内、字藏鹿の嶺で、この傾斜の広がりたる区域は、羽広、大堂の両部落を載せもって、東南に走り、南箕輪村と伊那町とにつづき、遂に天竜河域に至り、高遠方面の西方に走れる傾斜に合して居る。これが即ち、藏鹿傾斜地である。また、鹿屋の西南に向へる谷、即ち字御射山の傾斜は、上戸、中条、与地の3部を載せつつ西南に走りたるも、南方駒ヶ岳の傾斜の北向する勢力に推され、茲に方向を東北に取り、藏鹿より東南向する傾斜と合し、更に東向して走りたるかのように思はる。之を御射山傾斜地と名づけよう。一も一つ、藏鹿の嶺の北に於て、東北に開きたる大なる谷がある。これを大泉所と言う。この傾斜は、吹上、大泉新田、中曾根の三部を載せて、南、中の両箕輪に入り、天竜河域に至り、箕輪、東箕輪等の西向せる傾斜に出逢ふて居る。これが即ち大泉所傾斜地である。……そして、此大泉所の谷々より集り来る水は、時に或は暴張して、急端直下、両岩を削り土砂を洗ひて、恰も蛟龍の渓谷を出でて、天竜と嗜み合う如き猛勢を以て東奔するから、山麓にては、幅数百間、深さ數十丈の河原をなして居る。之は大泉川と言ふて、藏鹿傾斜と大泉所傾斜と合するあたりを、南北に中断して居る』

## 第3節 歴史的環境

歴史的環境についての節は一般的な説明を加えるよりも、第1図と、第1表をもって理解してもらいうようにしたので御承知願いたい。

この表の編年は分布調査によって表面採集した遺物によっていることを附記しておく。  
いままでに西箕輪地区で学術的な発掘調査がされたのは④塚畑、⑤古屋敷、⑥中の原の3カ所の遺跡である。前の3カ所は昭和50年度に実施された。

昭和51年度では本報告書の両遺跡の他に⑦の金鉛場遺跡の発掘調査がなされた。（小池政美）

第一章 まえがき、与地原・北割遺跡の環境



第1図 西箕輪地区遺跡分布図

遺 跡 の 名 称

- |           |          |           |           |
|-----------|----------|-----------|-----------|
| ① 中道南     | ② 横 畑    | ③ 久保田     | ④ 塚 畑     |
| ⑤ 高 根     | ⑥ 北 割    | ⑦ 田 代     | ⑧ 占屋敷     |
| ⑨ 金 鑄 場   | ⑩ 上 溝    | ⑪ 蔽鹿山麓    | ⑫ 経ヶ岳山麓   |
| ⑬ 西箕輪小学校北 | ⑭ 伊那養護学校 | ⑮ 熊野神社    | ⑯ 在 家     |
| ⑯ 大 葦 西   | ⑰ 殿 尾 敷  | ⑯ 宮 堀 外   | ⑰ 天 庄 1   |
| ⑰ 天 庄 2   | ⑱ 上 戸    | ⑰ 富 士 堀 外 | ⑰ 堀 の 内   |
| ⑲ 小 花 岡   | ⑲ 中 の 原  | ⑲ 下 の 原   | ⑲ 与 地 山 手 |
| ⑳ 与 地 原   |          |           |           |

No	遺跡名	所在地	旧石器	縄文時代				弥生時代			古墳時代	奈良・平安時代	中世	備考 (長野県遺跡地図番号)
				草	早	前	中	後	晚	前				
1	中道南	西笑輪吹上				○								
2	桜烟	*				○								
3	久保田	大泉新田				○						○		
4	塚烟	*				○						○		
5	高根	*				○								
6	北割羽広					○				○				(2602)
7	田代	*				○								(2601)
8	古屋敷	*				○				○				(2600)
9	金鉢場	*				○						○		(2599)
10	上溝	*					○	○			○	○	○	○ 財本と同じ
11	藏鹿山麓	*		○										
12	経ヶ岳山麓	*										○		和鏡
13	西笑輪 小学校北	大萱									○			
14	伊養護学校	那 8274	○								○			
15	熊野神社	*				○					○	○		(8678)
16	在家	* 7438～ 7444外			○									(8679)
17	大萱西	*	○		○									
18	敗屋敷	梨ノ木				○					○	○		(2608)
19	宮垣外	中 条				○	○				○	○	○	(2607)
20	天庄1	上戸				○					○	○		(2606)
21	天庄2	*				○								
22	上戸	*				○								
23	富士垣外	中 条				○								
24	堀の内	*				○								
25	小花岡	花 岡				○	○				○	○		(2605)
26	中の原	中の原				○								
27	下の原	上戸				○								
28	与地山手	与 地				○								
29	与地原	*				○								(2609)

第1表 西笑輪地区遺跡一覧表

## 凡　　例

1. 今回の発掘調査は西部開発に伴なう、県営畠地帯総合土地改良事業で、第4次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。
2. この調査は、県営畠地帯総合土地改良事業に伴う緊急発掘で、事業は長野県南信土地改良事務所の委託により、また国県市の補助金のもとに伊那市教育委員会が実施した。
3. 本調査は、昭和51年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は、後日の機会にゆずることにした。
4. 本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

小池政美 萩原 茂

◎図版作製者

◎遺構および地形

友野良一、小池政美、田畠辰雄、萩原 茂

◎土器拓影及び実測図

友野良一、小池政美、田畠辰雄、萩原 茂

◎写真撮影

◎発掘及び遺構

友野良一、小池政美、田畠辰雄

5. 本報告書の編集は主として、伊那市教育委員会があたった。

## 目 次

目 次.....	(6)
挿図目次.....	(7)
表 目 次.....	(7)
図版目次.....	(7)
第Ⅰ章 発掘調査の経過.....	(8~10)
第1節 発掘調査の経緯.....	(8)
第2節 調査の組織.....	(8~9)
第3節 発掘日誌.....	(9~10)
第Ⅱ章 遺 構.....	(11~16)
第1節 土 拡.....	(13~16)
第2節 ロームマウンド.....	(16)
第Ⅲ章 遺 物.....	(17)
第1節 土 器.....	(17)
第Ⅳ章 ま と め.....	(17)

## 目 次

### 挿 図 目 次

第1図 西箕輪地区遺跡分布図	(3)
第2図 地 形 図	(11)
第3図 造構配置図	(12)
第4図 第1・2号土塁実測図	(13)
第5図 第3号土塁実測図	(14)
第6図 第4号土塁実測図	(14)
第7図 第5号土塁実測図	(15)
第8図 第6号土塁実測図	(15)
第9図 第7号土塁実測図	(16)
第10図 第8号土塁実測図	(16)
第11図 第1号ロームマウンド実測図	(16)
第12図 土器拓影	(17)

### 表 目 次

第1表 西箕輪地区遺跡一覧表	(4)
----------------	-----

### 図 版 目 次

図版 1 遺跡全景
図版 2 造 構
図版 3 造 構
図版 4 造 構

## 第Ⅰ章 発掘調査の経過

### 第1節 発掘調査の経緯

西部開発事業（県営畠地帯総合土地改良事業）は伊那市竜西地区を区画整理する大規模な事業であります。当西箕輪地区は一昨年度より実施され、本年度に於いては羽広地区で北割遺跡、与地地区で与地原遺跡の2つが該当し、秋の収穫後に着工する運びとなった。

西部開発（県営畠地帯総合土地改良事業）の遺跡の調査を委託された場合は、受託されるよう県教育委員会より市教育委員会へ連絡があり、おって南信土地改良事務所より、緊急発掘調査について委託した旨、市教育委員会へ依頼を受けたので、市教育委員会を中心に、与地原遺跡発掘調査会を結成し、この中に調査団を含めて事務を遂行することとした。

南信土地改良事務所長と市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し、契約後、ただちに発掘準備にとりかかった。

### 第2節 調査の組織

#### 与地原遺跡発掘調査会

##### 調査委員会

委員長 松沢一美 伊那市教育委員会委員長

副委員長 福沢總一郎 伊那市文化財審議委員会委員長

委員 坂井喜夫 伊那市教育委員長

〃 向山雅重 長野県文化財専門委員

〃 木下衛 上伊那教育会会长

〃 原益久 南信土地改良事務所長

〃 長野伝衛 伊那市文化財審議委員

調査事務局 竹松英夫 伊那市教育委員会社会教育課長

〃 有賀武 " 課長補佐

〃 米山博章 " 係長

〃 三沢真知子 " 主事

##### 発掘調査団

団長 友野良一 日本考古学協会会員

副団長 根津清志 長野県考古学会会員

〃 御子柴泰正 "

調査員 小池政美 "

〃 田畠辰雄 "

### 第1章 調査発掘の経過

調査員	辰野伝衛	長野県考古学会会員
〃	福沢幸一	〃
〃	荻原茂	東京薬科大学学生
〃	赤羽義洋	国学院大学学生

### 第3節 発掘日誌

昭和51年12月6日 本日は発掘器材を運搬し、テントを設営した。テントは3張であり、東側に伊那市教育委員会の名のつくものが2張、その西側は長野県考古学会の名のつくものが1張であった。前者のは作業員達の休憩の場所とし、後者は道具置場とした。与地原遺跡は東側に傾斜した台地であった。割合に山際に沿っているので、風が強かった。明日より与地部落の人々が多く参加してくれると予定されていたので、作業の進捗状況がスムーズに行くためにグリットを設定しておくことにした。南から北へA~V、東から西へ1~42と決める。

昭和52年12月7日 本日は以前から依頼しておいた与地地区の作業員達が加わり、活気が満ちあふれてきた。昨日、ブルトーザーにより耕土剥ぎを実施した最末端部より一つおきに掘り下げていく。掘り進めていく、最末端の一区画を一日中かかって大般掘りつくしてしまう。この地区内では土壠3カ所、ロームマウンド1カ所の4つの遺構の検出があったが遺物の出土は全くなかった。

昭和51年12月8日 第1号土壠、第2号土壠、第3号土壠、第1号ロームマウンドを拡張し、プランを確認して掘り下げていく。作業員の人数が多く、また遺物が何も出土しないので、作業の進捗状況は極めて早く、本日の夕方までには道路沿の近くまで5枚の水田をそれぞれ掘り尽してしまった。

それぞれの水田から遺構が発見され、最も東側から1~5とした。1枚目には第1号土壠、第2号土壠、第3号土壠、第1号ロームマウンド、2枚目には第4号土壠、3枚目には第5号土壠、4枚目には第6号土壠、5枚目には第7号土壠、第8号土壠であった。

第2号土壠から第6号土壠のプランを確認する。



発掘風景

## 第Ⅰ章 発掘調査の経過

本日も遺物は何も発見されなかった。

昭和51年12月9日 本日は下界では晴天であったのに、与地原では道路面に雪が10cm位も積っていた。伊那市街と与地原とでは標高差にして300m位があるので、この程度の気候差があっても当然と思われた。第3号土塗、第4号土塗、第5号土塗は上部は円形であったのが、下部にいくと方形に構築されていた。

霜柱がたつようになつたので、遺構を破壊しないように上面にシートやござをかけて、破壊を最小限に防ぐようにした。本日も遺物は何も発見されなかった。

昭和51年12月10日 昨日、霜柱を防ぐために覆つておいたシートを取り、第6号土塗、第7号土塗、第8号土塗を掘り下げる。第7号土塗は8個の土塗のうちでは最も大きなものであった。

第1号土塗、第2号土塗、第3号土塗、第4号土塗、第5号土塗、第6号土塗、第7号土塗、第8号土塗、第1号ロームマウンドを完掘し、清掃を終える。どの遺構からも遺物の出土は全くみられず時代決定に困惑した。

午後、第1号ロームマウンド、第1号土塗、第2号土塗、第3号土塗、第4号土塗、第5号土塗、第6号土塗、第7号土塗、第8号土塗の写真撮影を終え、平面実測、断面実測をする。

昭和51年12月11日 今まで、掘った場所では遺物出土の期待は全くないものと考え、今まで掘った場所から少しほなれた所へところどころにグリットを入れて掘り起してみると、数片の縄文中期土器片が出土した。

昭和51年12月13日 発掘器材の点検やテントのとりこわし、あるいは、あとかたづけを一日かかって終わる。

昭和51年12月14日 発掘器材やテントを運搬して、あとかたづけをする。

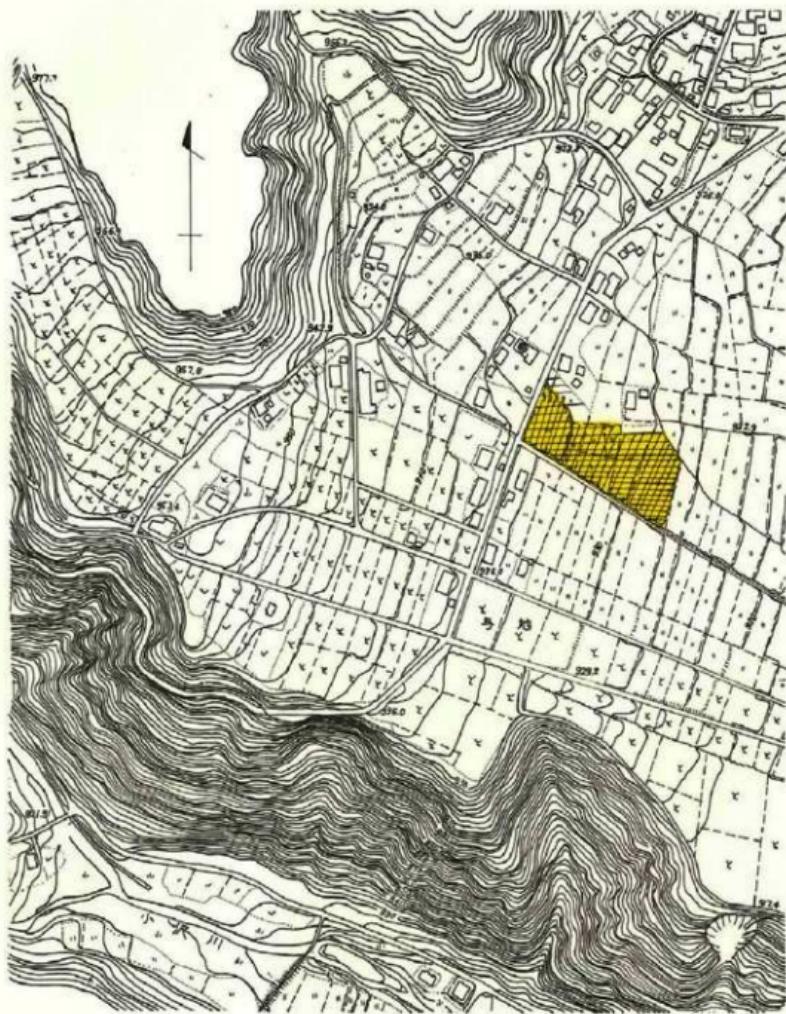
昭和52年1月 図版整理、報告書の作製、図面の整理。

昭和52年2月 報告書作製に必要な図面及び写真の点検整理、報告書の編集。

昭和52年2月 報告書を印刷所へ送る。

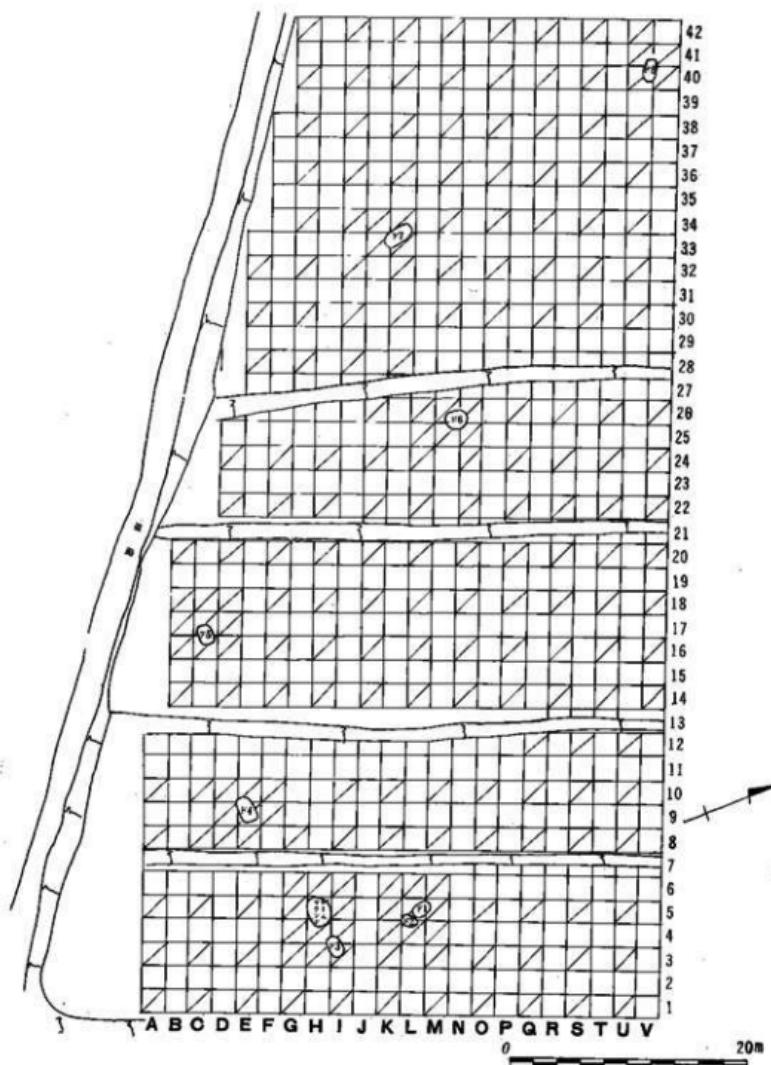
(小池政美)

## 第Ⅱ章 遺構



第2図 地形図

第II章 遺 構



第3図 遺構配置図

## 第1節 土 拝

## 第1号土拝 (第4図、図版2)

発掘地域の最も東側の水田に発見された土拝で、L5～M5の二つのグリットにまたがっているローム層を掘り込み、南北1m55cm、東西85cm程の規模を持っている。平面プランでは北側が隅丸方形形状になり、南東の一隅は幾分へっこんだかっこをしているが、全般的には隅丸長方形を呈している。壁高は北側ではほとんどないような状態を呈し、南側は30cm前後を測定でき、状態はやや内傾が強くなっている。この壁面は軟弱であった。床面は軟弱で、南半分はやや水平であるのに反して、北半分はこまかな凹凸が著しかった。

覆土内より少量の炭化物はみられたが、遺物は何も出土しなかった。

## 第2号土拝 (第4図、図版2)

発掘地区の最も東側の水田の耕作土層面より30cm位下った第4層のローム層を掘り込んで構築された土拝で、北側では第1号土拝と接している。その規模は南北95cm、東西1m25cm程で、プランは隅丸台形状を呈している。

壁高は東側では10cm、西側は15cm位は測定でき、軟弱であった。状態は東側では内凹、西側では内傾気味であった。床面はほぼ水平で、軟弱であった。

遺物は何も出土しなかったが、少量の炭化物の検出をみた。

## 第3号土拝 (第5図、図版3)

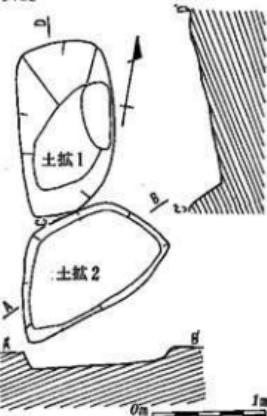
この土拝は第1号土拝、第2号土拝、ロームマウンドの三つの遺構に隣接して、その東側の位置に検出された。

第4層のソフトローム層を掘り込み、南北1m、東西1m70cm程の規模を有し、北側は円周状を、南側は直線状を呈し、全般的には長円形状の平面プランを呈している。壁面は垂直に近く、壁面上部はソフトローム層で、下部はハードローム層になっていた。深さは東側で75cm、西側で1m5cm位を測定できた。床面はハードローム層中につくられており、大般水平であった。床面の中央部よりやや南側によったところに直径10cm、深さ20cm程のピットが穿けてあった。用途については現在のところ不明である。

覆土中より少量の炭化物の検出はみられたが、遺物の出土はなかった。

## 第4号土拝 (第6図、図版3)

この遺構はソフトローム層面を掘り込み構築された土拝である。規模は南北1m15cm、東西1m80cm程で、深さは70～75cmの長円形状プランを呈している。壁の状態は内傾気味であった。高さは

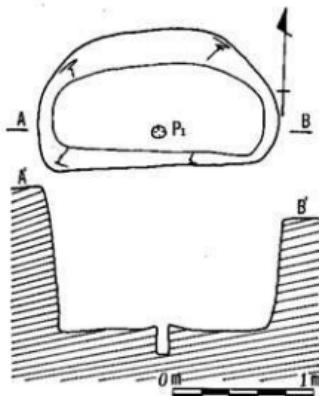


第4図 第1・2号土拝実測図

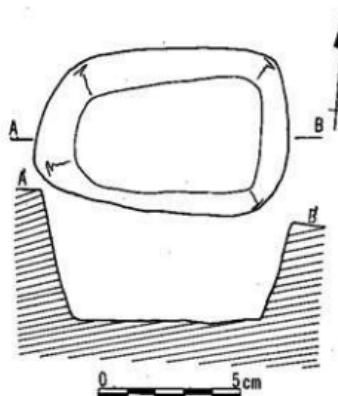
## 第Ⅱ章 遺 槽

東側では70cm、西側では90cm程あり、壁面はフラットで凹凸はわずかであった。壁面の上部はソフトローム層、下部はハードローム層でできていた。

床面はハードローム層中につくられ、ほぼ水平となっていた。覆土中より少量の炭化物は認められたが、遺物は何も出土しなかった。



第5図 第3号土塗実測図



第6図 第4号土塗実測図

### 第5号土塗（第7図、図版3）

東側より数えて3段目の南側道路面に近い、C16、C17に発見された土塗である。ソフトローム層面を掘り込んで構築され、その規模は南北1m10cm、東西1m50cm、深さは65cmを測定できる。プランは隅丸方形形状を呈している。壁の状態は東側で内窓気味で、西側は内傾状であった。

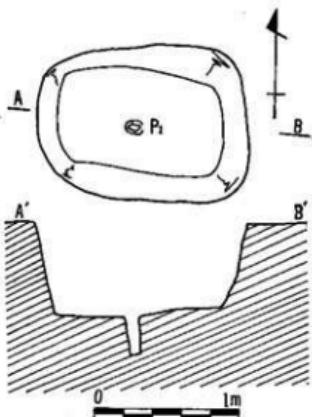
床面はハードローム層面にあり、水平状になっていた。中心部と思われる位置に直径10cm、深さ25cm位のピットがあけてあった。覆土中より少量の炭化物の出土はみたが、遺物の出土はなかった。

### 第6号土塗（第8図、図版4）

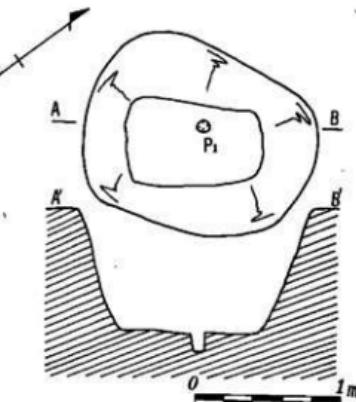
本遺槽は4段目の水田のはば中央よりやや西よりのN25~N26 O25~O26の4グリットにまたがって発見された。南北1m35cm、東西1m62cm程の規模で、円形プランを呈しており、深さは80~85cmである。壁の状態は東、西ともに内傾が強く、壁面上部はソフトローム層、下部はハードローム層でつくられ、平坦面になっている。高さは東は85cm、西は80cm位を測定できる。

床面はハードローム層中にあり、大般水平となっていた。平面プランは上部は円形状で、床面近くでは隅丸方形形状になっている。床面上の北側の方に小さな円形状のピットがあり、深さは13cm位であった。

覆土中より少量の炭化物はあったが、遺物の出土は全くなかった。



第7図 第5号土拵実測図



第8図 第6号土拵実測図

## 第7号土拵（第9図、図版4）

表土面より30cm位下ったソフトローム層面を掘り込んで構築された土拵であった。検出された所は東側より五段目の水田で、J33～K33、J34～K34の4グリット中であった。その規模は南北に長くて2m64cm、東西に短かくて1m12cmを算していた。平面形プランはところどころに幾分角張った様相を呈してはいるが、全般的には長円形状のかっこうをとっている。また底面近くでは、壁面を面取り状にしてあり、長方形に近くなっていた。

壁は北側では65cm、南側では90cm位を測り、内傾がやや強くなっていた。上部はソフトローム層下部はハードローム層を成していた。床面はハードローム層面に構築され、大般平坦であった。床面の中央部よりやや東側へよったところに直径10cm、深さ37cm程の小ピットがあけてあったが、用途については現在の段階では不明である。

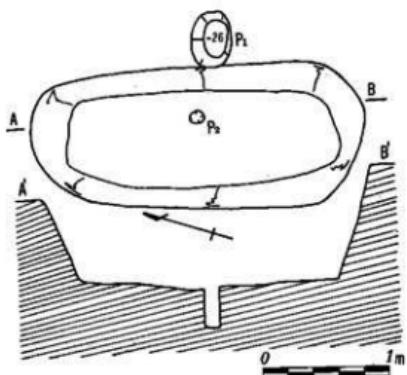
## 第8号土拵（第10図、図版4）

この遺構はVライン状に発見された唯一の土拵であって、表土面より40cm位下ったソフトローム層面を掘り込んで構築されていた。プランは隅丸方形状で、規模は南北97cm、東西1m40cm、深さは30cm位であった。壁は全局しており、全て30cm前後位であり、幾分内傾状態をとっていた。深さが他の土拵に比較して浅いために、壁はソフトローム面であった。

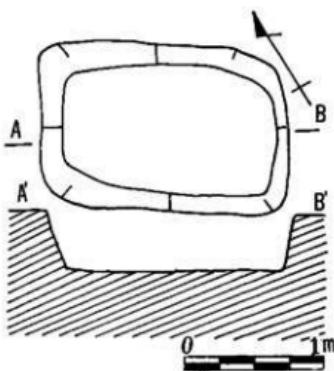
床面はソフトローム層面につくられ、かたくたたいてあり、ほぼ水平状になっていた。覆土中より、少量の木炭の検出はみられたが、遺物の出土は何もなかった。

以上、8個の土拵の説明をしてきてみたが、共通な個所は多くの点で認められるが、遺物の出土が何もないために時代決定が全く不可能である。

（小池 政美）



第9図 第7号土拵実測図



第10図 第8号土拵実測図

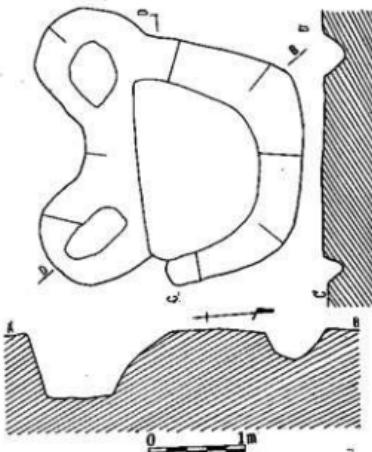
## 第2節 ロームマウンド

### 第1号ロームマウンド (第11図、図版2)

調査地の東端部、第3号土拵内西側に位置している。マウンドは南北2m25cm、東西2m70cm程、高さは20~70cmで、南側には巾50cm、深さ70cm程、北側には巾45cm、深さ30cm、東側には巾35cm、深さ20cm程、西側には巾50cm、深さ25cm程の溝が回わっている。

形状は南西と南東の隅は丸く突び出している。北西と北東の隅は隅丸方形状になっている。前者の二つの隅の突起部にはそれぞれピットが附隨している。

頂部は黒土層が混合したような状態を呈し、表面はほぼ水平状であった。頂部から傾斜面に移行する面は若干内傾斜を呈し、崩落しないようにかたくたいた痕跡が認められた。マウンドの形成土は大部分がソフトロームであり、なかにブロック状に黒色土やハードロームが混入していた。このブロック状の土のなかより少量の木炭の検出はみられたが、遺物は何も検出されなかった。よって時代は不詳。 (荻原 茂)



第11図 第1号ロームマウンド実測図

### 第三章 遺 物

#### 第1節 土 器

第12図の(1~3)の土器片は全て表面探集によるものである。

(1~2)は同一個体の破片と思われる。表面に細線を無線に不規則状に施してある。明褐色を呈し焼成は中位で、少量の長石粒を含んでいる。

(3)は器面が剥落が著しい。ハの字状に沈線を配している。赤褐色を呈し、焼成は中位で少量の長石粒を含んでいる。(1~3)は加曾利E期に含まれるであろう。その他の遺物として近世の陶器片が少量出土したのみであった。

(荻原 茂)



第12図 土 器 拓 影

### 第四章 ま と め

与地原遺跡は伊那竜西地区で西部開発が行なわれる計画が明らかになった折りに発見された新しい遺跡である。与地の原は水の点で遺跡地としてはあまり期待が持てそうな状態ではなかった。実際に発掘してみると、当初、思っていたとおり土塙8、ロームマウンド1、遺物としては土器片3と近世陶器片少量といううびしい結果となってしまった。

土塙は第1号土塙、第2号土塙を除いて、他の6つの土塙は上面はそれぞれ異っていたが、下部は方形に近いかたちをとっていた。第3号土塙、第5号土塙、第6号土塙、第7号土塙の4つの土塙の床面には直径10cm位の小さなピットが大般同じ位置にあけられていたが、何に使用されたものは現在のところ不明である。また上塙内の出土遺物は全くなかったので時代決定は不可能である。想像するに形態や造りからして近世時代の墓塙ではないかと思われる。

ロームマウンドは今まで発見されたものと大差はなかった。遺物は加曾利E期の新しい方に属しているものと思われる。

(小池政美)

# 図 版



遺跡地を東側より眺む



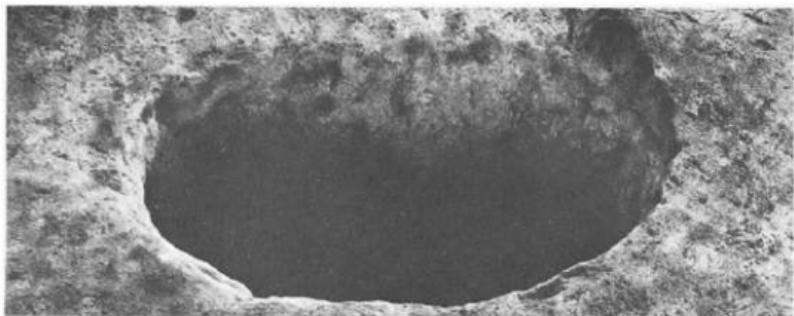
遺跡地を西側より眺む



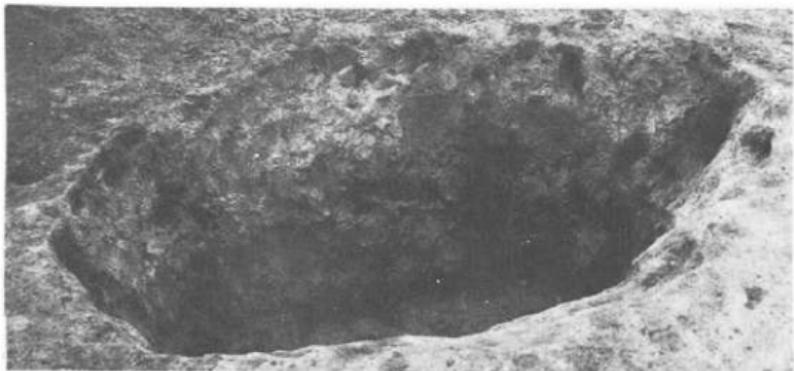
第1号・2号土堆



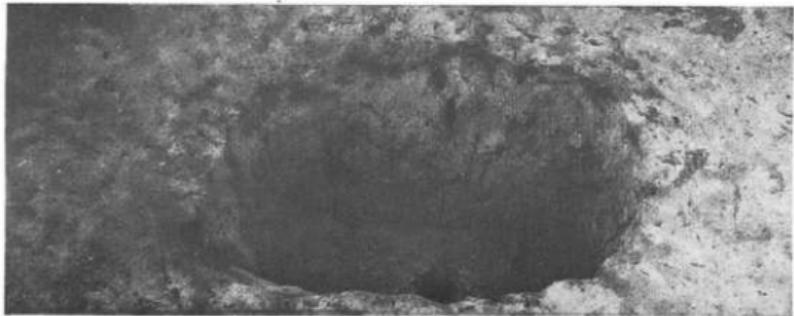
第1号ロームマウンド



第3号土坑



第4号土坑



第5号土坑



第6号土坑



第7号土坑



第8号土坑

北 割 遺 跡



## 凡　　例

1. 今回の発掘調査は西部開発に伴なう、県営畠地帯総合土地改良事業で、第4次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。
2. この調査は、県営畠地帯総合土地改良事業に伴なう緊急発掘で、事業は長野県南信土地改良事務所の委託により、伊那市教育委員会が実施した。
3. 本調査は、昭和51年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は、後日の機会にゆすることにした。
4. 本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

小池政美、田畠辰雄、荻原茂

### ◎図版作製者

- ・遺構および地形  
友野良一、小池政美、田畠辰雄、荻原茂
- ・土器実測図  
友野良一、小池政美、田畠辰雄、荻原茂

### ◎写真撮影

- ・発掘及び遺構  
友野良一、小池政美、田畠辰雄

3. 本報告書の編集は主として、伊那市教育委員会があたった。

## 目 次

目 次.....	( 4 )
挿図目次.....	( 5 )
表 目次.....	( 5 )
図版目次.....	( 5 )
 第 I 章 発掘調査の経過.....	( 6 ~ 8 )
第 1 節 発掘調査の経緯.....	( 6 )
第 2 節 調査の組織.....	( 6 ~ 7 )
第 3 節 発掘日誌.....	( 7 ~ 8 )
 第 II 章 遺 構.....	( 9 ~ 14 )
第 1 節 住居址.....	( 10 ~ 14 )
 第 III 章 遺 物.....	( 15 ~ 18 )
第 1 節 土 器.....	( 15 ~ 17 )
第 2 節 石 器.....	( 17 ~ 18 )
 第 IV 章 ま と め.....	( 18 )

## 目 次

### 挿 図 目 次

第1図 地形図.....	(9)
第2図 遺構配置図.....	(10)
第3図 第1号住居址実測図.....	(11)
第4図 第2号住居址実測図.....	(12)
第5図 第2号住居址炉址実測図.....	(13)
第6図 第3号住居址実測図.....	(13)
第7図 第4号住居址実測図.....	(14)
第8図 土器実測図.....	(15)
第9図 土器実測図.....	(15)

### 表 目 次

第1表 出土土器の形状一覧表(その1).....	(16)
第2表 出土土器の形状一覧表(その2).....	(16)
第3表 出土土器の形状一覧表(その3).....	(17)
第4表 出土土器の形状一覧表(その4).....	(17)
第5表 出土石器の形状一覧表(その1).....	(18)

### 図 版 目 次

図版1 遺跡全景
図版2 遺構
図版3 遺構
図版4 遺構及び遺物出土状況
図版5 遺物出土状況
図版6 遺物出土状況
図版7 出土土器
図版8 出土土器
図版9 出土土器
図版10 出土土器
図版11 出土石器

## 第Ⅰ章 発掘調査の経過

### 第1節 発掘調査の経緯

西部開発事業（県営畠地総合土地改良事業）は伊那市竜西地区を区画整理する大規模な事業であります。当西箕輪地区は一昨年度より実施され、本年度に於いては羽広地区で北割遺跡、与地地区で与地原遺跡の2つが該当し、秋の収穫後に着工する運びとなった。

西部開発（県営畠地総合土地改良事業）の遺跡の調査を委託された場合は、受託されるよう県教育委員会より市教育委員会へ連絡があり、おって南信土地改良事務所より、緊急発掘調査について委託した旨、市教育委員会へ連絡を受けたので、市教育委員会を中心に、北割遺跡発掘調査会を結成し、この中に調査団を含めて業務を遂行することにした。

南信土地改良事務所長と市長との間で『埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書』を締結し、契約後、ただちに発掘準備にとりかかった。

### 第2節 調査の組織

#### 北割遺跡発掘調査会

##### 調査委員会

委員長 松沢 一美 伊那市教育委員会委員長

副委員長 福沢總一郎 伊那市文化財審議委員会委員長

委員 坂井 喜夫 伊那市教育委員長

“ 向山 雅重 長野県文化財専門委員

“ 木下 衛 上伊那教育会会长

“ 原 益久 南信土地改良事務所長

“ 辰野 伝衛 伊那市文化財審議委員

調査事務局 竹松 英夫 伊那市教育委員会社会教育課長

“ 有賀 武 “ 課長補佐

“ 米山 博章 “ 係長

“ 三沢真知子 “ 主事

##### 発掘調査団

団長 友野 良一 日本考古学協会会員

副団長 根津 清志 長野県考古学会会員

“ 御子柴泰正 “

調査員 小池 政美 “

“ 田畠 長雄 “

## 第1章 発掘調査の経過

調査員　辰野 伝衛 長野県考古学会会員  
〃 福沢 季一 〃  
〃 萩原 茂 東京薬科大学学生  
〃 赤羽 義洋 国学院大学学生

### 第3節 発掘日誌

昭和51年11月24日 発掘現場にテントを設営し、この作業は午前中一杯かかって終了した。午後より南信土地改良事務所の配意によるブルトーザーを遺跡地へ入れて耕土剥ぎを実施する。作業員達は耕土の深さを確認するためにところどころにつぶ振り状にグリットを入れてその深さは計測する。

昭和51年11月25日 当初、ブルトーザーを入れた南側の地区にグリットを入れて、振り下げてみると、山麓線上のために山より流れ出した土砂のために堆積が1m以上を越していた。遺物の出土量はかなりの量を占めたが、なにせ、土層が不安定なために遺構確認や、振り下げにはちょっと困難な点があると考えられたので、一応、土層確認をしただけで、調査を断念して、調査地区を北側へ移すことにする。

昭和51年11月26日 北側地区に新たにブルトーザーを入れて耕土剥ぎを実施してみると、ちょうどうまいところに命中したとみて、ブルトーザーを押す段階で、住居址と思われる落ち込みがみられた。耕土剥ぎは約1時間位で終了し、ただちにグリットを設定して振り下げを開始する。

グリットを振り下げていくと、住居址の確認があちこちでみられ、北側より第1号住居址、第2号住居址と名付け振り下げを実施する。1日中かかって、ほぼプラン確認を終了する。

昭和51年11月27日 本日より第1号住居址、第2号住居址の振り下げを実施する。第2号住居址の振り下げを進めていくと、遺物は住居址全面にわたって出土した。西箕輪地区の初めて発掘に参加した作業員達は大いに喜んでいた。両住居址はともに加曾利E期の新しい方であった。

昭和51年11月29日 第1



発掘風景

## 第Ⅰ章 発掘調査の経過

号住居址の完掘を終え、写真撮影をするとともに、すぐに実測にとりかかる。第2号住居址の掘り下げを進めていくと、水田造成の折り大部分取土をしたとみえて、住居址の壁は西側では10数cm位東側はほとんどないような状態であった。一つ、一つ掘り下げていくとペールを剥ぐようであった。

昭和51年11月30日 第3号住居址と第4号住居址を検出し、プラン確認ができると同時に、その掘り下げを開始する。第2号住居址を掘り下げていくと炉は中央よりやや北よりにあり、炉内には一個体分の土器を炉底一面に敷いてあった。

昭和51年12月1日 第2号住居址と第3号住居址の完掘をする。

昭和51年12月2日 第4号住居址を完掘した。柱穴の存在はほぼ等間隔に入り、住居址としての様相を呈していた。炉の位置は一般的であったが、形態はあまり良い感じではなかった。

昭和51年12月3日 第1号住居址から第4号住居址までの4住居址の清掃を終え、写真撮影をする。第1号住居址と第2号住居址の実測をする。

昭和51年12月4日 午前中に第3号住居址と第4号住居址の実測と全測図の作製をする。午後、発掘器材のあとかたづけをして発掘を終了した。

昭和52年1月 発掘した出土品の洗浄、あるいはまた注記を行ない、報告書作製のまず第一段階の仕事をする。

初期の仕事の用意ができたので図面作製あるいは写真的準備をする。

報告書の編集をする。

昭和52年2月 報告書を印刷所へ送る。

(小池政美)

## 第二章 遺構



第1図 地形図

## 第1節 住居址

## 第1号住居址（第3図、図版2）

発掘地区の北側の方のB10～D10, A11～D11, A12～D12のグリッド内にまたがって検出された住居址であった。南北6m50cm, 東西6m20cm程の規模で、ほぼ円形状平面プランを呈している。本址は砂礫混りの黄褐色土層を掘り込んだ竪穴住居址で、壁高は低いところで10cm, 高いところで45cm位掘り込んでいた。

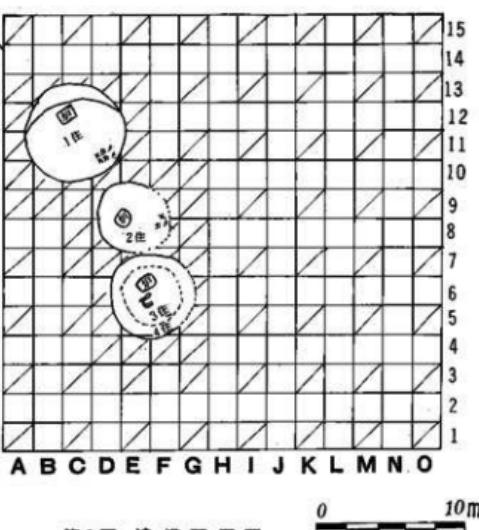
床面は黄褐色土層をかたく叩いて構築されており、ほぼ水平であった。また壁面直下に東から北から南へ回るようにして幅10cm, 深さ数cm程の周溝が回っていた。

柱穴はいわゆるピットと呼ばれるものは全部で22ヵ所検出されたが、柱穴と決めていいものは深さからして8本だと思われる。それはP2, P3, P6, P10, P14, P17, P20, P22であると思われる。なかでも特徴的なものとしてP22だけの1ヵ所が壁外に出ている。

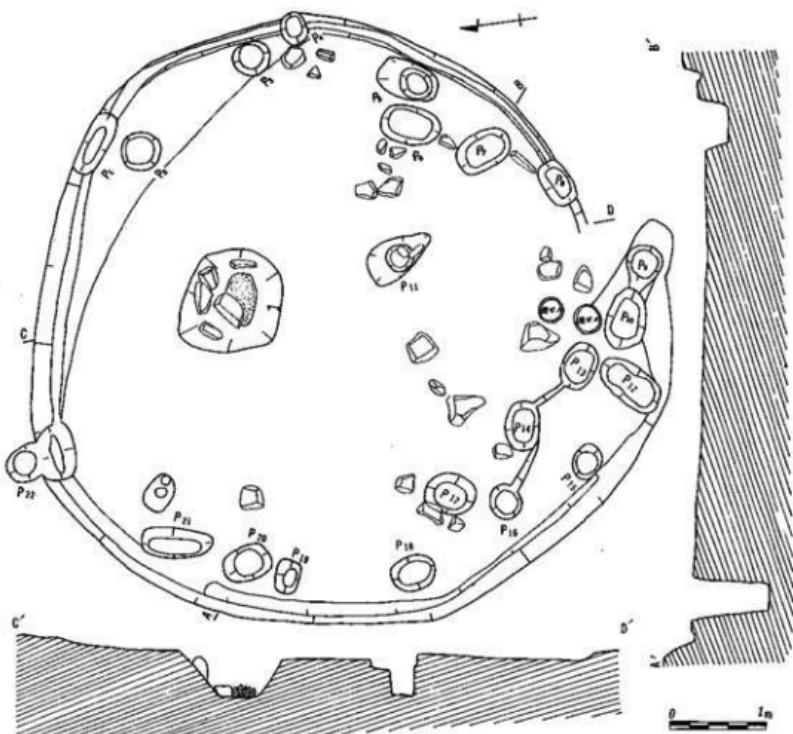
炉は中央よりやや北寄りに位置し、断面すりば

ち状のものである。大きさは南北1m3cm, 東西1m10cm程であり、炉石と思われるもの残りは北側に集中して残存しており、南側には抜き取られた石の跡が明瞭であった。炉石の石質は大部分が変成岩系のものであった。炉のつきものである焼土は壁面にはその姿はみじんもなく、底面に集中しているのが特徴的であった。

遺物は南壁の近くに埋甕が2個並んで出土した。遺物は全般的に縄文中期後葉、所謂、加曾利E期のものが大部分であった。



第2図 遺構配置図



第3図 第1号住居址実測図

## 第2号住居址 (第4図、図版2)

本址は第1号住居址の南側、第3号住居址、第4号住居址の3軒にはさまれたような具合で検出された。南北推定4m80cm程、東西も同じく推定4m80cm程の規模を持ち、不整円形プランを呈する堅穴住居址である。壁は水田造成のおりに破壊されたとみえて全般的に低く、西、南、東に回わる住居址の半分は全くなかった。

床面は全般的に水平であり、良好なる叩きを呈していた。また、同面上の石はホルンヘルスであった。また同面の北側から東側にかけて幅5cm~10cm、深さ10cmの数箇をもって周溝が回っていた。柱穴は大般にわたって、壁に沿って回っており、4カ所発見され、これらは全て主柱穴になると思われる。柱穴にもいろいろの形態があつてP1は補助穴、P4は北側が断面袋状に、P3は石を持っている等のいろいろの諸特徴をもつている。

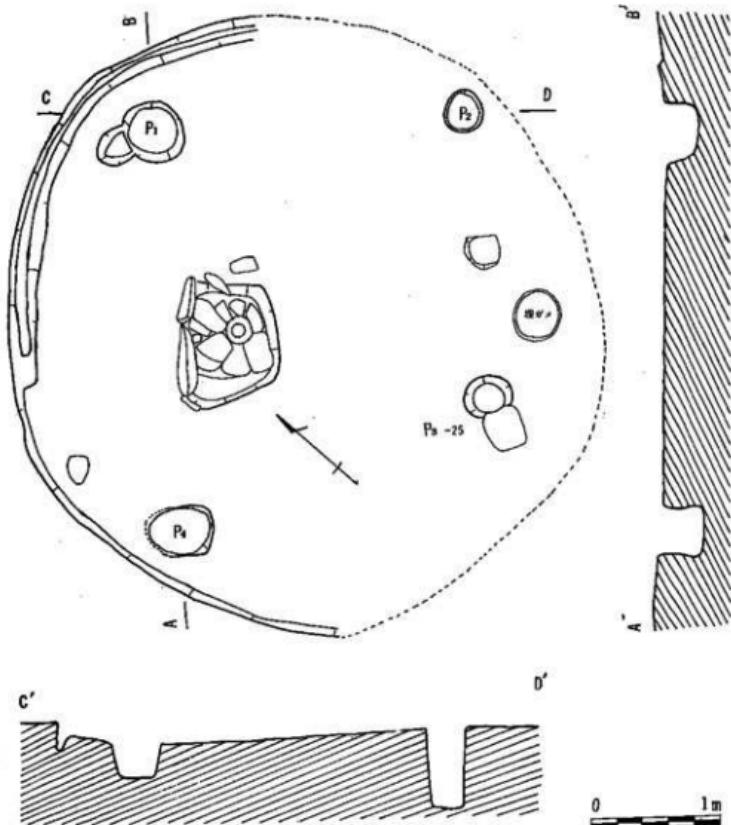
炉は中央より北側にあって、構築当時はおそらく、方形石炉であったと思われるが、現在は北

## 第二章 遺 墓

側の石が2個残っているだけである。この石はホルンヘルスである。南側の炉縁には抜き取ったとみえる石の跡があった。断面はすりばち状になっており、その断面状の縁に焼土の堆積が明瞭であった。炉の壁面の周囲に同一個体の土器片を内面を上に向けて敷いてあり、炉の中心部よりやや南側によった位置に同一個体の底部を上に向けて置いてあった。これらの土器は当然、炉内の湿気を防ぐために敷いたものと思われる。

遺物はP3のすぐ近くの南壁と思われる所より正位の埋甕の出土をみた。この埋甕は口唇部が床面と全く同一レベルの状態で埋っていた。その他、全般的に加曾利E期の土器片が大部分であった。したがって、本址も加曾利E期の住居址であろう。

(小池 政美)



第4図 第2号住居址実測図

## 第Ⅱ章 遺構

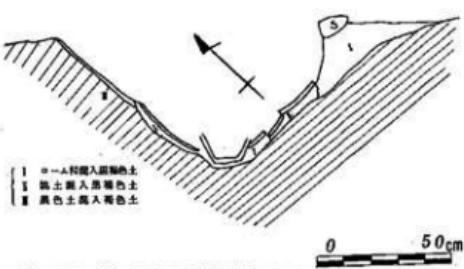
### 第3号住居址（第6図、岡版3）

本址は第2号住居址の南側、第4号住居址の上に貼床をしたかっこうで発見された住居址である。水田造成の折に壁は破壊されてしまったとみて不明瞭ではあるが、南北4m95cm、東西4m50cm（推定）程の規模を有している。壁高は前述したような諸条件によつてほとんどない状態であり、あるところでもわずかに10cm前後であった。

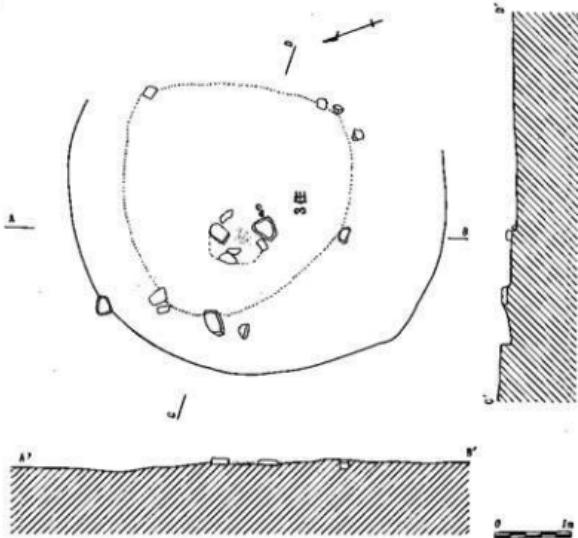
床面は異色土の極めて良好なるたたきであった。ほぼ水平であり、特に内周の破線部より内部は外側のそれ以上にかたかった。柱穴は発掘中は色の差異がほとんどなかったので把握することはできなかった。

炉は住居址の中央部と思われる部分にあり、その規模は南北90cm、東西75cm位であり、それらの石の内部にわずかに焼土の検出がみられた。遺物は内部より加曾利E期の土器片が多量に出土した。

（荻原 茂）



第5図 第2号住居址炉址実測図



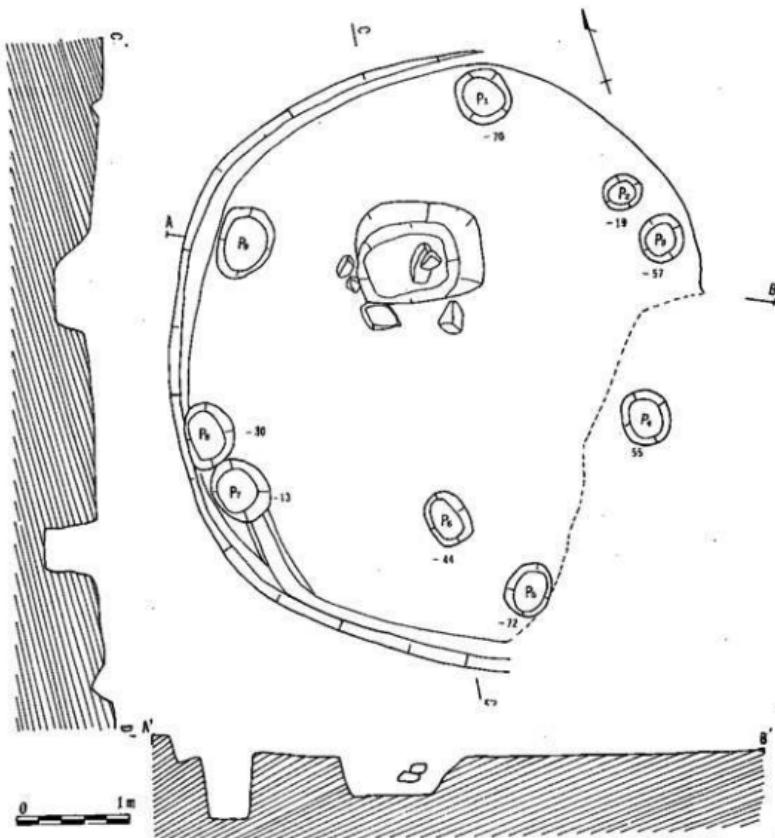
第6図 第3号住居址実測図

## 第Ⅱ章 遺 墓

### 第4号住居址 (第7図、図版3)

本址は第3号住居址の下に発見され、推定で、南北4m85cm、東西5m程の規模で円形プランを呈している竪穴住居址である。壁高は浅くて数cmから20cm位の間に入っている。状態は浅いために明瞭なることは把握できなかった。床面はローム層のかたい叩きで、ほぼ水平であった。また北、西、南にかけて半周状に周溝がまわっていた。

主柱穴は壁に沿って全周するように回っていた。それはP1, P3, P4, P5, P8, P9の6本であると思われる。がの位置は中央部よりやや北側にあり、たらい状に落ち込んでおり、焼土は炉底に集中していた。周辺に散乱する石はホルンヘルスであった。遺物は加曾利E式。  
（田畠辰雄）



第7図 第4号住居址実測図

## 第三章 遺物

### 第1節 土器

第7図は第1号住居址の北壁近くに出土した土器である。器高は37cm、胴部は直径31.5cm、厚さは1.5cmの大きさで内窓している壺型土器である。文様は大体三つに大別できる。それは口唇部、口頸部、胴部である。まず、口唇部は無文部が大部分を占めている。口頸部は横帯文様帶がその主流をなし、まことに方形状に隆帯によって区画されたなかに、さらに細かな隆帯を波状に配している。それらの中へ、ところどころに隆帯の結末を大きく突起状にまるけてある。横帯文様帶と横帯文様帶との間はところどころはくぎれで無文部がみられた。

胴部文様帶は中央部に大きな、また太い隆帯が垂下し、その分かれがところどころ渦巻状になって終末となっている。それらによって区画された空間部に刻突文風の沈線を矢羽根状や稜杉状に施してある。色調は赤黄褐色を呈し、焼成は中位で、多量の雲母や長石を含んでいる。

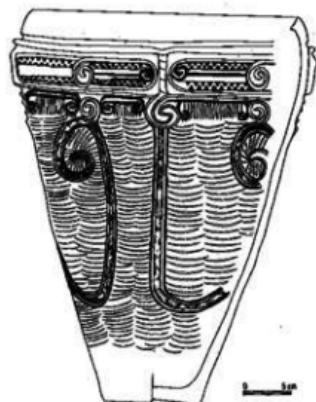
第8図は第2号住居址の東壁近くに埋蔵の状態で出土した土器である。器高は41cm、胴部は直径24cm、厚さは1cmの大きさで、口縁部は内反し、胴部から底部にかけて直線状に走っている壺型土器である。文様は通常呼ばれている器型の部分部な名称によって次の三つに分類できよう。口唇部は大部分が無文で、わずかに下部に数条横位の沈線が走っている。口頸部は横帯文様帶が主体をなし、その下に隆帯を蕨手状に施してある。

胴部から底部にかけての文様帶は隆線が蕨手状風に走り、それらの間に肋骨文風の沈線が配されている。

色調は赤黄褐色を呈し、焼成は中位で、多量の雲母や長石を含んでいる。一般的に当地方にみられる埋蔵に使用されている代表的な文様の一つと思われる。



第7図 土器実測図



第8図 土器実測図

### 第二章 遺物

土器の説明は表を作製し、一見のものと理解できるようにした。一覧表の見方について項目別に簡単な内容的説明を附記しておくことにする。胎土、保存状態、色調についての記述は、明らかな基準によったものではなく、筆記の主觀によるものである。

(小池政美)

図版	番号	胎 土	保存状態	色 調	厚さ (mm)	文様の特徴	備 考
7	1	多量の雲母	良 好	茶褐色	6	刺突文、縄文、沈線	第1号住居址(口縁部)
"	2	"	中 位	"	7	隆帯、沈線、刻目	" "
"	3	少量の長石	良 好	黒褐色	10	隆帯、沈線、縄文	第1号住居址
"	4	多量の長石	中 位	茶褐色	10	沈線、縄文	"
"	5	少量の雲母	中 位	茶褐色	11	"	"
"	6	多量の長石	中 位	白褐色	8	沈線	"
"	7	少量の長石	不 良	赤褐色	7	隆帯、刻目	"
"	8	"	中 位	白色	9	隆帯、沈線	"
"	9	"	中 位	赤褐色	9	隆帯、刻目	"
"	10	"	"	"	7	沈線	"
"	11	"	"	白色	5	沈線、縄文	"
"	12	多量の雲母	"	"	7	隆帯、沈線	"

第1表 出土土器の形状一覧表(その1)

図版	番号	胎 土	保存状態	色 調	厚さ (mm)	文様の特徴	備 考
8	1	少量の長石	良 好	黒褐色	7	沈線、隆帯、刺突文	第2号住居址
"	2	多量の長石	良 好	黒褐色	6	波状文、隆帯、沈線	"
"	3	多量の雲母	中 位	赤褐色	7	隆帯、爪形文、沈線	"
"	4	少量の長石	良 好	白褐色	11	縄文	"
"	5	少量の雲母	中 位	黒褐色	11	隆帯、沈線	"
"	6	多量の長石	中 位	茶褐色	9	縄文、沈線	"
"	7	少量の長石	不 良	黒褐色	11	刻目、沈線	"
"	8	"	"	茶褐色	9	沈線、刺突文	"
"	9	多量の長石	中 位	赤褐色	8	縄文、沈線、刺突文	"
"	10	少量の雲母	中 位	茶褐色	7	隆帯、沈線、刺突文	"
"	11	少量の長石	不 良	黒褐色	11	沈線、刺突文	"

第2表 出土土器の形状一覧表(その2)

## 第三章 遺物

図版	番号	胎 土	保存状態	色 調	厚さ (mm)	文様の特徴	備 考
9	1	少量の雲母	中 位	黄褐色	7	沈線、隆帯	第3号住居址
"	2	多量の雲母	"	茶褐色	8	隆帯、縦文	"
"	3	"	"	黒褐色	6	隆帯、沈線	口縁部
"	4	多量の長石	良 好	黒褐色	8	"	口縁部
"	5	多量の雲母	中 位	明黄褐色	8	沈線、蛇行隆帯	第3号住居址
"	6	"	良 好	黒褐色	8	隆帯、沈線	口縁部
"	7	"	中 低	黒褐色	7	隆帯、沈線	口縁部
"	8	少量の長石	良 好	赤褐色	6	沈線、刻目	"
"	9	"	"	"	6	蛇行沈線、沈線	"
"	10	多量の長石	良 好	黄褐色	10	隆帯、刻目	"
"	11	多量の雲母	中 位	茶褐色	7	縦文、沈線	"
"	12	多量の長石	良 好	明褐色	8	隆帯、刻目、縦文	"
"	13	少量の長石	中 位	赤褐色	8	隆帯、沈線	"
"	14	"	中 位	黄褐色	7	隆帯、沈線	"

第3表 出土土器の形状一覧表(その3)

図版	番号	胎 土	保存状態	色 調	厚さ (mm)	文様の特徴	備 考
10	1	多量の雲母	中 位	黒褐色	7	隆帯、沈線	第4号住居址
"	2	多量の長石	良 好	赤褐色	5	"	"
"	3	少量の雲母	良 好	明褐色	14	隆帯、沈線、刻突文	"
"	4	"	"	"	14	"	"
"	5	"	中 位	黒褐色	6	沈線	"
"	6	"	"	赤褐色	6	渦巻文、沈線	"
"	7	"	良 好	白褐色	5	沈線	"
"	8	"	"	赤褐色	5	隆帯、沈線	"

第4表 出土土器の形状一覧表(その4)

## 第2節 石 器

石器の説明は表を用いることとする。表の項目は図版、番号、名称、器形、石質、備考である。

(小池 政英)

図版	番号	名 称	器 形	石 質	備 考
11	1	磨製石斧	定角形	蛇紋岩	第1号住居址
"	2	打製石匙		硬砂岩	"
"	3	磨製石斧	定角形	蛇紋岩	第2号住居址
"	4	"	"	綠泥岩	第3号住居址
"	5	"	"	"	第4号住居址
"	6	"	乳棒状	"	グリット
"	7	凹 石		花崗岩	"
"	8	"		"	"

第5表 出土土器の形状一覧表(その1)

## 第IV章 ま と め

昭和51年11月下旬から12月上旬にかけて、経ヶ岳より吹き降ろす寒風にさらされながら西箕輪羽広地区の北端、北割の地で発掘を行なった。その結果、縄文中期時代の住居址4軒の調査を行なうことができた。これらの調査により得た問題点の2~3について述べてみたいと思う。

本遺跡は大泉川の右岸河成段丘と、経ヶ岳山麓より発達した複合扇状地上に存在する遺跡の1つである。遺跡は以前より、水田造成の折りに、たびたび、土器や石器が出土し、地元住民がそれを多量に採集したと言う話を幾度となく聞いたので、発掘以前より、かなり濃密な出土があるものと期待をかけていた。

本遺跡で検出された4軒の住居址は特定なものではなくて、ごく、一般的なものであった。

プランの問題では、4軒とも、発掘した時点では不明瞭な住居址であったが、構築当時は円形であったと推定できよう。規模に関しては5畝から6m50cm程度であった。

炉址は全て石圓炉であり、第2号住居址のように、炉底に一個体分の土器を敷きつめてあるものもあった。

遺物に関しては第1号住居址と第2号住居址に床面に口縁部をつけた正位の埋甕がみられた。位置では前者は南側に、後者は東側にあり、前者は東西に二つ並んで埋っていた。

埋甕自体の編年的な位置にごく一般的なものと考えられる。その他の土器としては縄文中期全般に亘るものが出土地しておった。

石器については、器種は磨製石斧、打製石斧、凹石であった。

終わりにあたり、地元、西箕輪、伊那市教育委員会、南信土地改良事務所職員一同の熱意ある御協力に感謝の意を捧げます。

(小池政美)

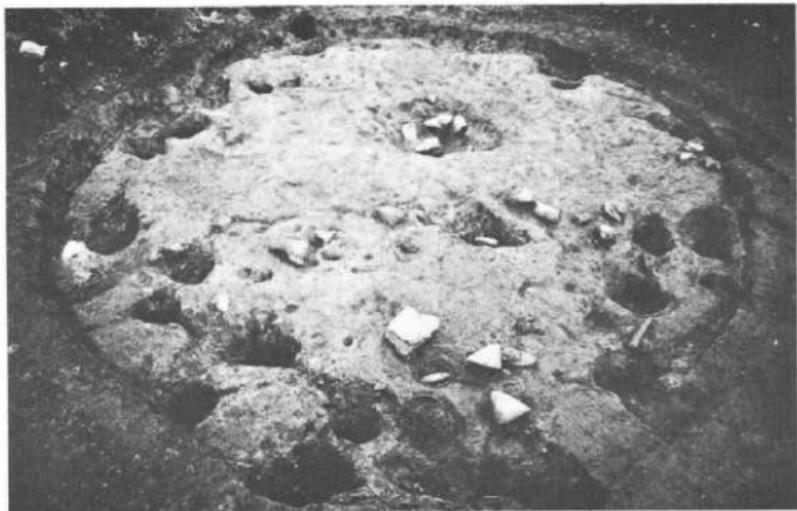
# 図 版



遺跡地を南側より眺む



遺跡地を東側より眺む



第1号住居址



第2号住居址



第3号住居址



第4号住居址



第1号住居址炉址



第2号住居址炉址



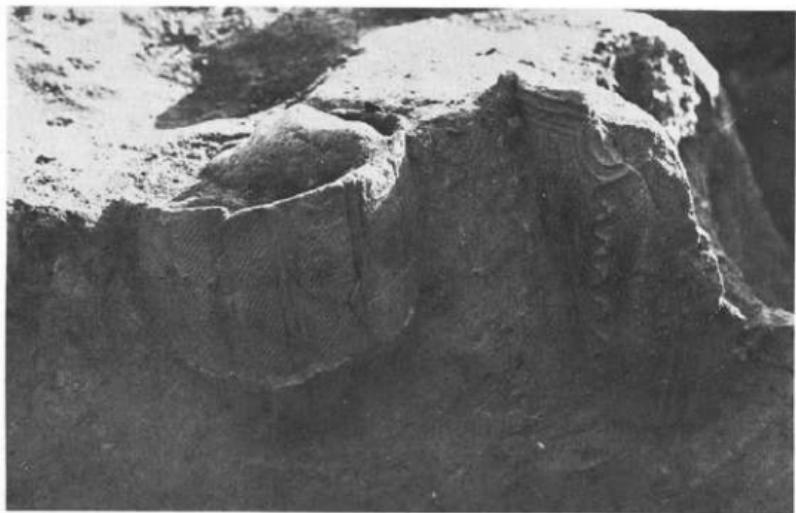
第3号住居址炉址



第4号住居址炉址



第2号住居址炉址内出土土器状况



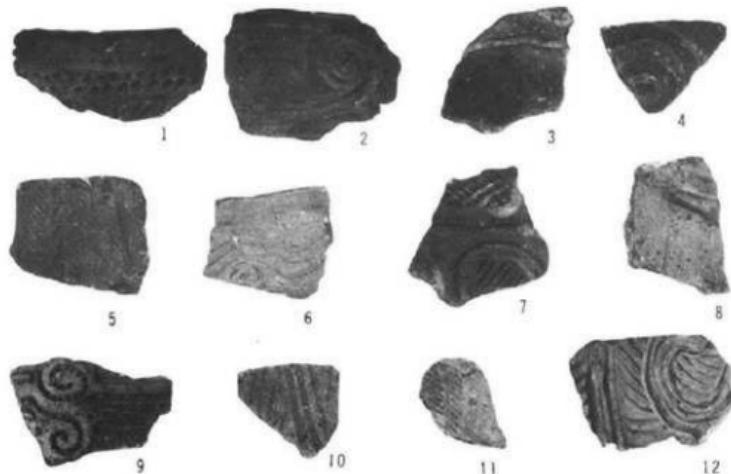
埋甌出土状况(第1号住居址)



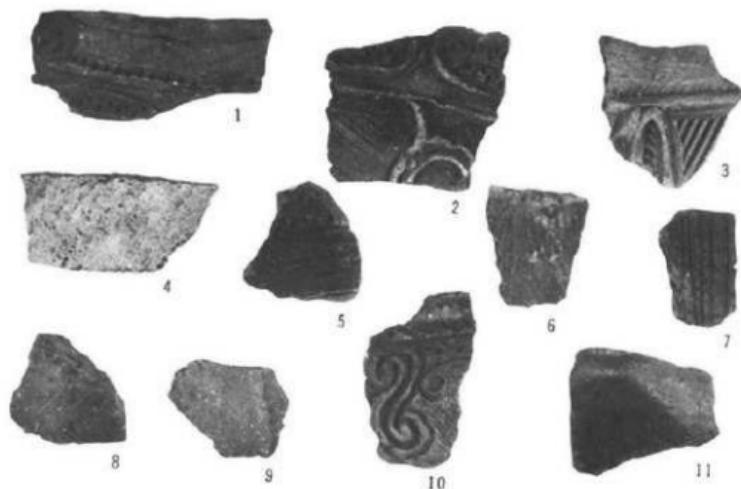
土器出土状况(第1号住居址)



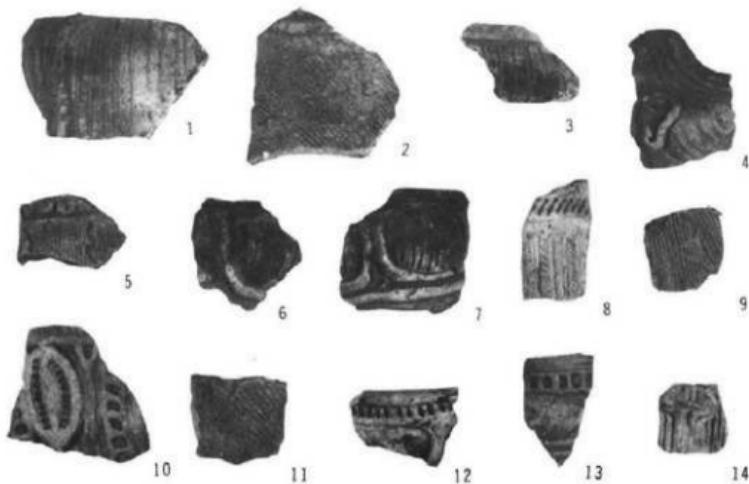
圖版 6 遺物出土狀況(第 2 号住居址埋甕)



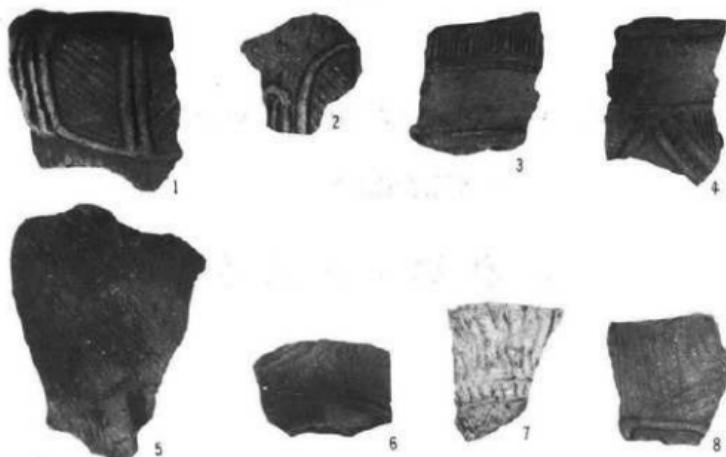
圖版 7 出土土器



图版8 出土土器



图版9 出土土器



図版10 出土土器



図版11 出土石器

北割遺跡  
—緊急発掘調査報告—

昭和52年3月15日 印刷  
昭和52年3月25日 発行

発行所 長野県伊那市教育委員会

印刷所 長野県伊那市旭町  
徳中山印刷所

